

東アフリカの遺跡と陶磁器

—クラウドファンディングによる教育研究実践の一実例—

長崎大学 野上 建紀

金沢大学 佐々木達夫

長崎大学 金城 康哉

Archaeological sites and Ceramics in the East Africa

-An example of educational research practice supported by crowdfunding

Takenori Nogami (Nagasaki University)

Tatsuo Sasaki (Kanazawa University)

Koya Kinjo (Nagasaki University)

Abstract

The purpose of this research is to clarify the relationship between East Africa and Asia from the perspective of ceramics trade. To that end, we challenged to acquire research funds through crowdfunding. As a result, we acquired our travel expenses to Africa and conducted our field survey in the summer of 2018. We went to Zanzibar, Dar es Salaam, Bagamoyo, and Kilwa Kisiwani, and surveyed some museums and archaeological sites and investigated ceramics. In Zanzibar, we found some Japanese porcelains in the Palace museum. They were produced in Arita, Saga prefecture in the 19th century. And we collected many shards of Chinese porcelain on the beach in Stone Town, Zanzibar. They show us the condition of ceramic trade in the Indian Ocean. Then we researched on the collection of museums in Dar es Salaam and Bagamoyo. Moreover we went to Kilwa Kisiwani site and researched the tomb of Sultan where Japanese porcelain was discovered half a century ago. It was blue and white dish with the design of Kraak style and was produced in Arita in the 17th century. Although the research on ceramic trade between East Africa and Asia in the early modern period has just begun, we have found the possibility of the research.

Key Words: East Africa, ceramic trade, porcelain, crowdfunding

1. はじめに—クラウドファンディングの経緯

クラウドファンディングを始めたきっかけは、今回の共著者の一人である学生の金城康

哉によるゼミ発表であった。金城はクラウドファンディングが学術的な研究にどのような効果をもたらすか、持続可能な研究資金として活用することが可能か、その現状と課題について明らかにしたいと考えた。一方の野上はアフリカ、特に東アフリカにおける陶磁器流通に関する研究を以前より行いたいと考えていたが、すでに科学研究費による研究は、別の研究テーマで行っていたため、新たな資金を必要としていた。

そのため、今回の東アフリカにおける陶磁器流通、特に日本磁器の流通に関する研究について、クラウドファンディングによる資金調達を目指すことにし、2018年5月にクラウドファンディングの挑戦を開始した。クラウドファンディングのホームページに研究紹介用の文章と写真を掲載し、動画の撮影も行い、アップロードさせた。新聞記事、大学のホームページのトップバナーにも掲載し、宣伝を図ったが、主な宣伝媒体はSNS(特に twitter)であった。その結果、81名の支援者を得て、目標金額の600,000円を大きく上回る809,436円の支援金を獲得することに成功した。

ただし、支援金額がそのまま研究費となるわけではない。まず20%が手数料等で運営会社に支払われ、返礼のための支出(グッズの制作など)を差し引いた金額が、大学等の所属研究機関(今回の場合は長崎大学)へ研究費として寄付される。つまり経費233,797円を差し引いた575,639円が運営会社から大学へ寄付される。さらに寄付の受入れ側の大学も事務処理経費として寄付金の2%にあたる11,512円を引き去るため、実際に研究に使える金額は564,127円である。

得られた研究費は、ほぼ現地調査の旅費にあてられた。すなわち、アフリカまでの航空運賃と滞在費、国内の生産地調査の交通費と滞在費である。

2. 研究テーマ

研究テーマは、アフリカに渡った日本の陶磁器の実態の解明である。特に江戸時代にアフリカに渡った肥前磁器の流通のあり方を明らかにすることを目的とする。もう少し詳しく述べよう。江戸時代の肥前磁器は、唐船やオランダ船によって長崎から東南アジア、ヨーロッパへと輸出されていたが、太平洋貿易を行っていたスペイン船によってアメリカ大陸に運ばれていたことも明らかになった(野上 2013)。いわゆる「鎖国時代」にスペイン船は長崎で交易によって日本の産物を入手することができなかったが、唐船によって長崎からもたらされた肥前磁器をマニラからアカプルコへ向けて運んでいた。同様にインド洋で

活動していた交易船も長崎に来航することはなかったが、東南アジアの港市にもたらされた肥前磁器をアラブ系およびインド系の商人の船やポルトガル船が、東アフリカなどに運んでいたのではないかと考えたのである。すでに東アフリカで数点、肥前磁器が採集されているが、野上は単発的な輸入ではなく、継続的なものであったと考えている。その仮説を証明し、実態を明らかにすることを主テーマとしている。

また、東アフリカに渡った日本の陶磁器は、江戸時代の肥前磁器だけではなく。2017年にザンジバルで現地調査を行った川畑容は、野上がヨーロッパ系と分類した軟質磁器の中に日本国産の硬質陶器が含まれている可能性を指摘した（川畑 2018）。また、器ではないが、日本製の陶磁器タイルがザンジバルに運ばれていたことを増田研が明らかにしている（増田 2018）。

この研究は始まったばかりであるが、今後、継続して調査研究を行い、近世以降の日本とアフリカの関わりを明らかにしていきたいと思う。

3. 東アフリカ現地踏査の成果

2018年5月から6月にかけてタンザニア共和国のザンジバル、8月にタンガニーカ（ダレエスサラーム、バガモヨ、キルワ・キシワニ、キルワ・キヴィンジ）の現地踏査を行った（図1～3）。以下、それらの踏査の成果を述べる。

3.1 ザンジバル

クラウドファンディングの挑戦と並行しながら、2018年5月から6月にかけて、野上がザンジバルの調査を行った。ストーンタウンおよび郊外を中心に遺跡や歴史的建造物の調査を行うとともに、ストーンタウンの海岸にて陶磁器採集を行った。このザンジバルの調査成果については別の論文で述べるので、ここでは詳しく触れない。日本磁器が確認された施設と海岸採集資料についてのみ筆者の別論文¹より転載する。

3.1.1 パレス博物館（図4）

スルタンの所有品として幕末明治の日本の色絵大壺や大皿が所蔵されていることを確認した。

色絵大瓶は3点あり、有田製とみられる（図6）。いずれもいわゆる「べべら口」とよばれる波状の口縁のあるラッパ口状の口部を持ち、下半部がふくらんだ重心の低い形状を

している。一つは岩に鳥、菊、牡丹、桜が染付で描かれ、花や葉の一部や底部付近の蓮弁文に赤、金の上絵が施されている。また、鳥文の付近に小さく「四左」の文字が上絵付けされている。4個のセットであったのであろうか。一つは菊と梅樹が染付で描かれ、梅花や草花などが赤と金の上絵が施されている。また口部付近は丸く白抜かれ、中に楼閣山水文が入れている。もう一つは龍文を胴部に貼り付けた色絵大瓶である。龍文を貼り付けた瓶は有田だけではなく、三川内でもみられる。遠目で観察する限り、染付はなく、絵付けは全て上絵で行われている。松、竹、牡丹、鷹、菖蒲などが上絵で描かれている。体部には松皮菱の形の窓絵を重ねて、松原文などを窓の中に描いている。

色絵大皿は2点あり、いずれも染付で内側面を6分割に区画し、草花文や椿文を描きこんでいる。見込みは染付と上絵を組み合わせた花卉文が入る。精製コバルトを使用しており、明治以降の製品であろう。

3.1.2 ストーンタウン海岸 (図5)

ストーンタウンの海岸ではこれまでも多くの陶磁器片が採集されている(阿部・牛久編 2017、川畑 2018)。今回は中国磁器を中心に採集を行なった。採集された陶磁器片の年代は、最も古いもので18世紀中頃まで遡る可能性があるが、多くは19世紀のものである。生活廃棄品が主と見られるが、かつて税関が置かれていた箇所にも近いため、荷揚げの際に破損して投棄されたものも含む可能性がある。

3.2 バガモヨ

バガモヨはダルエスサラームから海岸沿いに80kmほど北上した位置にある。インド洋に面した都市であり、内陸部への交易ルートの起点になる一方、沖合のザンジバルへ内陸部の物資を積み出す交易港となっている。とりわけ奴隷の輸出港として19世紀に発展した。ドイツの統治時代には首都となったが、19世紀末にはダルエスサラームへ首都が移転している。

3.2.1 カオレ遺跡 (Kaole) (図7)

バガモヨの町中から南へ5kmほどの場所にカオレ遺跡がある。モスク跡や墓が残る13世紀頃の都市国家遺跡である。22基の墓があり、その内、8基の墓が柱をもつという。遺跡内にある資料展示室にはバガモヨやタンザニアの他地域で出土した陶磁器などが展示されている。カオレ遺跡出土の竜泉窯の青磁盤(図8)、褐釉壺の他、ダルエスサラーム近郊のクンダッチー(Kunduchi)遺跡から出土した18~19世紀の青花碗(図9)や山水文

小壺（図10）、海岸部の遺跡で発見された青花山水文蓋物（身）、クワレ（Kwale）で発見された清朝の色絵蓮花文皿（図11）、ミササ遺跡（Misasa）で発見された18～19世紀の青花皿や瑠璃釉製品（碗か）などが現地産土器やイスラーム陶器、ヨーロッパ陶器などとともに展示されている（図12）。また、遺跡表面では中国青磁や紡錘車などが確認された。

3.2.2 カトリック教会博物館（RC Mission 博物館）（図13・14）

2000年8月23日にRashidiの娘であるMwanaidiによって寄附されたヨーロッパ製の陶器が展示されている（図15～17）。曾祖母から代々、受け継がれてきた陶器類である。祖母のMlakilimaは1897年生まれ、母のHadijaは1910年生まれである。一家はMsataへ向かうBagamoyo通りに近いKidongo chekunduに住んでいる。展示されているのは彩色が施された軟質磁器の碗と皿2点である。碗の底部にはTRADE MARK、ADAMS. ENGLANDの文字と鹿の図柄がスタンプされている（図17）。皿の一つの底部には王冠のマークがスタンプされている（図15）。

3.2.3 キャラバンセライ（The Caravan Serai）

2002年の発掘調査によって出土した遺物が展示されている。陶磁器等では土器片に混じり、主にヨーロッパ系の陶磁器の破片が見られる。その他、鉄製の錠、弾丸、1888年銘のドイツ貨幣、1905年銘の貨幣、ガラス製品、動物の骨などが展示されている。

3.3 ダルエスサラーム

国立博物館（図18）にはタンザニア国内で出土した陶磁器が展示されている（図20）。キルワ・キシワニ遺跡の発掘調査報告書に掲載されている陶磁器が見られるため、キルワ・キシワニ遺跡の遺物を含むとみられるが、出土地の表示がないため、同じ展示ケースであってもそれ以外の遺跡の出土品も含まれているかもしれない。現地の土器や西アジアなどのイスラーム陶器のほか、明代の青花碗、清代の唐花唐草文の青花皿、寿字梵字文の青花皿、徳化窯系の型成形の青花碗などがみられる（図21～22）。

その他、ダルエスサラーム郊外のクンダッチーで出土した清代の寿字蝶文の色絵小皿（図23）、クンダッチーのイスラーム墓地で発見された青花皿（図24）が展示されている。

また、ダルエスサラームの民家の装飾としてイスラーム陶器が壁に埋め込まれている展示が見られる（図19）。

3.4 キルワ・キシワニ

ダルエスサラームから車で半日かけて、キルワ・マソコに行き、そこから船でキルワ・キシワニに渡る。現在は小さな村が存在するだけであるが、かつてはインド洋貿易で栄えた都市であり、点在する遺跡がその繁栄を物語っている。

Malindi Mosque、Gereza、Great Mosque、Great House、Chittick's House、Small Domed Mosque (図27・28)、Makutani、Jangwani Mosque、Tombs of the Kilwa Sultans、Kisima Kikuu (Great Well)、Husuni Kubwa の各遺跡の踏査を行なった。Chittick's House は、キルワ・キシワニの遺跡の発掘調査を行なったチチックの調査基地であり、20世紀の遺構であるが、その他はキルワ・キシワニがスワヒリ都市として繁栄していた時期の遺構である。

上陸地近くの墓地には、墓の壁面に陶磁器を貼り付けていた痕跡が多数見られ、その一つには中国青花皿の一部が残っていた (図25・26)。

Tombs of the Kilwa Sultans (図29) は、墓の壁に陶磁器が貼り付けられていたと見られる痕跡が多数見られる。チチックのキルワの発掘調査報告書に掲載されている17世紀後半の染付芙蓉手皿 (図30) が発見された遺構である。チチックが発掘した遺物を調査したジョン・ポープが1968年にマニラの学会で、「伊万里」が含まれていることを発表しているが、おそらくこれがその資料であろうと見られる。陶磁器が貼り付けられていた部分に陶磁器はすでになく、漆喰状のもので修復が施されており、直接貼り付けられていた面を確認することはできない。

チチックの家 (Chittick's House) (図31) 前に広がる海岸では、13世紀から19世紀にかけての陶磁器が散布している。竜泉窯の蓮弁文碗、ミャンマー青磁の盤、景德鎮の明代の青花皿や白磁皿 (あるいは碗)、福建広東の清代の印青花碗などが確認できた (図32)。その他、島内のサッカー場では清代の唐花唐草文の青花皿の底部、Kisima Kikuu (Great Well) 近くの民家付近では四方襷文が口縁部外周にめぐらされた明代の青花碗などが確認できた。

4. 調査成果と今後の計画

アフリカに渡った日本陶磁については、いくつかの時期のものに分けられる。17世紀後半、17世紀末～18世紀前半、19世紀中頃～後半、20世紀前半～中頃である。

17世紀後半に渡った陶磁器は、清による海禁政策下に中国磁器に代わって海外輸出された肥前磁器である。東アフリカのケニアのモンバサ周辺、タンザニアのキルワ・キシワニで採集されている染付芙蓉手皿などが該当する。フスタート遺跡で出土している柿右衛門様式の色絵碗（コーヒーカップ）、ケープタウン周辺の遺跡で出土している肥前磁器の一部も含めてよからう。

17世紀末～18世紀前半に渡った陶磁器は、清による海禁政策が解除された後も引き続き、長崎のオランダ貿易を中心にヨーロッパ向けに輸出が継続された頃のものである。モンバサのフォート・ジーザスに残る色絵大壺、ケープタウン周辺の遺跡で出土している肥前磁器の一部、モーリシャス出土の有田磁器が該当する。また商品というより船上の使用品・備品の可能性が高いものとして、1697年にケープタウン沖で沈んだオースターランド号から発見された白磁瓶、白磁アルバレロ壺がある。

19世紀中頃～後半は、肥前磁器が再び海外輸出時代を迎えた時期である。日本磁器はヨーロッパで開催された万博でも好評を博し、ジャポニスムの流行にも後押しされて、肥前磁器だけでなく、薩摩焼や九谷焼、瀬戸焼など各産地の陶磁器が海外に輸出された。ザンジバルのパレス博物館で確認できた色絵大壺や色絵大皿などが該当する。

20世紀前半～中頃は、ザンジバルの海岸で採集されている近代の染付型紙摺り碗、硬質陶器やザンジバルの墓地に貼られたタイル等が該当する。染付型紙摺り碗はアラビア半島などでもみられるもので、量的には不明なもののインド洋の広範囲に分布が広がるものではないかと考えている。沖縄などではスンカンマカイとよんでいるもので、四国の砥部などでいわゆる「南方向け」に生産されたものである。砥部の染付型紙摺り碗はパキスタンなどインド洋周辺地域へも輸出されており、それらが二次的に広く流通した可能性も考えられるものである。アフリカに運ばれた日本製の硬質陶器やタイルについては、それぞれ川畑や増田らによって報告されている（川畑 2018、増田 2018）。日本製の硬質陶器でメーカーが判明しているものは笹井（笹伊）製陶所、山庄製陶所などであり、いずれも四日市に所在した陶磁器メーカーであった。

5. クラウドファンディングの経緯と総括

5.1 クラウドファンディング挑戦の経緯

野上にとって、クラウドファンディングによって資金を調達して、研究費にあてる試み

は初めてであったし、資金調達を学生とともに行うことも初めてであった。クラウドファンディングを行うにあたって、クラウドファンディングの運営会社の選定を行った。選定と言いながら、国内の学術系のクラウドファンディングの運営会社の数は少なく、複数の運営会社を比較検討したわけではなく、金城が紹介するアカデミスト株式会社の実績等を検討した上で決定を行った。

今回のクラウドファンディングは、いわゆる購入型であり、支援者は研究者に対して「寄付」を行うのではなく、返礼（リターン）を「購入」する形をとる。そのため、支援（購入）にあたっては消費税がかかる。そして、支援者の購入総額の20%を手数料として差し引いた分が研究費にあてられるわけであるが、今回は返礼となる物品作成（Tシャツ）にかかる費用をさらに差し引いた額が運営会社から研究機関側（長崎大学）に寄付された。ちなみに長崎大学の場合、外部資金の研究費については寄付を行う旨の規定があるが、仮にそうした規定がなく、直接、支援金（売上金）を受領した場合は個人の収入とみなされ、確定申告等の手続きが必要となる。

なお、支援者の名前等は筆者らには伝えられない。大学への寄付はアカデミストの名前で行われ、支援者の名前で行われるわけではない。筆者らに対する支援者リストは、名目上、アカデミストの購入者リスト（顧客リスト）であるためであろうが、身近に支援者がいたとしても直接、礼を伝えることができず、不義理となることも少なくない。今後、改善の余地があるであろう。

クラウドファンディング開始時期が2018年5月、終了時期が2018年7月27日であったため、およそ2ヶ月余の広報活動による。まずアカデミストのホームページに掲載する研究紹介の記事を執筆し、動画の撮影を行った。記事の文章と写真等は野上が準備し、動画の撮影は学生の齋藤優次郎（多文化社会学部4年）、川畑容（同）、宮城敬（同）の協力の下、金城が行った。

返礼については、野上と金城で協議しながら決定していった。返礼は、5段階の購入金額（1,000円、5,000円、10,000円、30,000円、50,000円）に応じたものとなっている。1,000円は調査レポート（電子版）、5,000円はオリジナルTシャツと調査レポート（電子版）である。10,000円はそれらにサイエンスカフェ参加権が加わり、30,000円はさらに論文謝辞に支援者の氏名掲載、50,000円はそれら全てに加えて個別ディスカッション権が加わる。

調査レポートは、タンザニアの現地調査の報告や研究論文を電子化したものであり、それを支援者全員に配信する予定である。本報告もその一つである。オリジナルTシャツは、

2017年に海外フィールドワーク実習でザンジバルに出かけた学生の一人である梶原拓樹（多文化社会学部4年）が現地で学んだ「マサイペインティング」によって描き下ろしたデザインをプリントしたTシャツである。

5.2 広報と宣伝

クラウドファンディングの広報や宣伝は、資金調達を目的としたものであることは確かであったが、それは同時に筆者らの研究テーマや研究プロジェクトについて周知化を図る活動でもあった。広報や宣伝の媒体は主に電子ジャーナル記事、新聞記事、ホームページ、SNS（facebook と twitter）などである。

5.2.1 電子ジャーナル記事

クラウドファンディングの運営会社が発行する *academist journal* という電子ジャーナルに「陶片から伊万里の流通を探る－中南米からアフリカまで」と題した研究コラムを投稿した。投稿日は2018年7月4日である。

5.2.2 新聞記事

2018年7月6日付け長崎新聞にて、野上のセラミックロードの研究に関する内容とともに金城を中心とした学生のクラウドファンディングの取り組みがカラー紙面にて紹介された。記事には支援者への便宜を図るためクラウドファンディングのHPのアドレスのQRコードを掲載した。

5.2.3 大学ホームページ

学部内の審議を経た上で大学ホームページのトップバナーに掲載された。新聞や大学ホームページへの掲載については、必ずしも直接、支援に結びつくものではなかったが、一般の人々への研究プロジェクトの周知と認知、一定の信頼性の確保に効果があったと考える。

5.2.4 SNS (facebook、twitter)

直接的な支援を得るという意味において、最も効果的な媒体はSNSであったと感じるが、支援者に関する情報を入手しているわけではないので、正確なところはわからない。

5.2.5 学生等による宣伝

伊万里市などの市役所に直接、研究の宣伝を依頼してくれた学生もいた。市役所のHP等の掲載はかなわなかったが、陶磁器に関する研究会のメーリングリストによる通知が実現し、支援に結びついた例もあった。

5.3 クラウドファンディングの結果

7月18日に目標金額であった600,000円に到達し、前に述べたように終了日の7月27日には809,436円に達した。支援していただいた方の人数は1,000円が35名、5,000円が29名、10,000円が9名、30,000円が5名、50,000円が3名であった。中にはお一人で180,000円の支援をくださった方もいた。大学への振込は終了日から3ヶ月以上経た11月中旬のことであった。

5.4 研究成果の共有と還元

次に東アフリカの現地踏査から帰国した後における成果の共有と還元について述べる。まず2018年10月13日付け西日本新聞に2018年8月のタンザニア調査の記事が掲載され、広く調査内容を周知することができた。記事では、筆者の過去の中南米の調査成果やキルワ・キシワニ遺跡のスルタンの墓の筆者撮影の写真とともに、今回のタンザニアの調査の目的と今後の計画が紹介された。

続いて2018年11月17日には長崎大学文教キャンパスで調査研究報告会（サイエンスカフェ）を開催した。支援金額（正確には購入金額）が10,000円以上の支援者を対象としたものである。参加者は2名のみであった。野上の調査報告のほか、金城および川畑容による報告が行われ、東アフリカの現地踏査の内容とともに、クラウドファンディングの研究費としての可能性について、話題を提供し、懇談した。

調査報告や論文については、本報告の他に「ザンジバルにおける海岸採集磁器」（野上）、「インド洋海域交易で運ばれたミャンマー青磁」（佐々木・野上）の執筆を行った。前者は考古学・陶磁器関係の学会誌に投稿済みで査読を受ける予定であり、後者は本報告と同じ紀要に掲載予定である。

6. おわりに—今後の課題

今回のクラウドファンディングによる資金調達によって得られた研究費による研究はとりわけ大きな学術的成果が得られたというものではなかったが、今後の研究の大きな可能性を感じ取ることができた。今後、科学研究費等の資金獲得につなげて、今回の研究シーズを芽吹かせ大きく育てていきたいと思う。

また、研究だけでなく、教育上の効果も高かったと考える。金城がクラウドファンディ

ングの持続可能な研究費としての可能性について、川畑がアフリカに渡った近代日本陶磁について、それぞれ卒論テーマに選び、その成果に結びついた点は直接的な成果であるが、それ以外にもクラウドファンディングのための準備や対外交渉など挑戦過程の作業もまた学生にとってよい経験になったと思う。

さらに一般の人々にも学問の魅力であったり、学生の活動について知っていただくよい機会にもなったと思う。特に一般の方々に魅力を伝える過程は筆者らにとっても新鮮なもので、通常の講演会などとは違う反応を楽しみながら、研究を紹介することができた。多くの方々はお名前もお顔も存じ上げないが、大きな励みとさせていただいたことを報告させていただきたい。

なお、本文中の学生の学年等は2018年10月現在のものである。

最後になったが、今回のクラウドファンディングによる研究費調達にあたり、次にあげた方々をはじめ、多くの方々のご支援を賜った。芳名を記させていただき、謝意を表したい。

渡辺芳郎さん、高野季久美さん、末次健太郎さん、竹内俊之さん、中山さつきさん、福満博子さん、増田研さん、石松紀子さん、船井向洋さん、藤原友子さん、近江美保さん、松下久子さん、上田千鶴子さん、山田貴己さん（長崎新聞）、柴藤亮介さん（academist）（順不同、敬称略）

注

- 1 「ザンジバルにおける海岸採集磁器」2018年12月、投稿。

引用文献

- 阿部哲・牛久晴香編2017『ザンジバルに学ぶ多文化社会の生き方』長崎大学多文化社会学部
川畑容2018「欠片から視るストーンタウンでの食器の変遷」『現代ザンジバルにおける社会の動態－ローカリティとグローバル化のフィールドワーク－』長崎大学多文化社会学部 pp. 162-179.
野上建紀2008「アフリカに渡った伊万里」『アフリカ研究』72号 pp. 67-73.
野上建紀2013「ガレオン貿易と肥前磁器－二つの大洋を横断した日本のやきもの－」『東洋陶磁』第42号 pp. 141-176.
野上建紀2017『伊万里焼の生産流通史－近世肥前磁器における考古学的研究』中央公論美術出版
増田研2018「ザンジバルに渡った日本製マジョリカタイル」『現代ザンジバルにおける社会の動態－ローカリティとグローバル化のフィールドワーク－』長崎大学多文化社会学部 pp. 180-186
増田研・阿部哲・寺野梨香編2018『現代ザンジバルにおける社会の動態－ローカリティとグローバル化のフィールドワーク－』長崎大学多文化社会学部
Nevill Chittick 1974. *Kilwa: an Islamic Trading City on the East African Coast.*

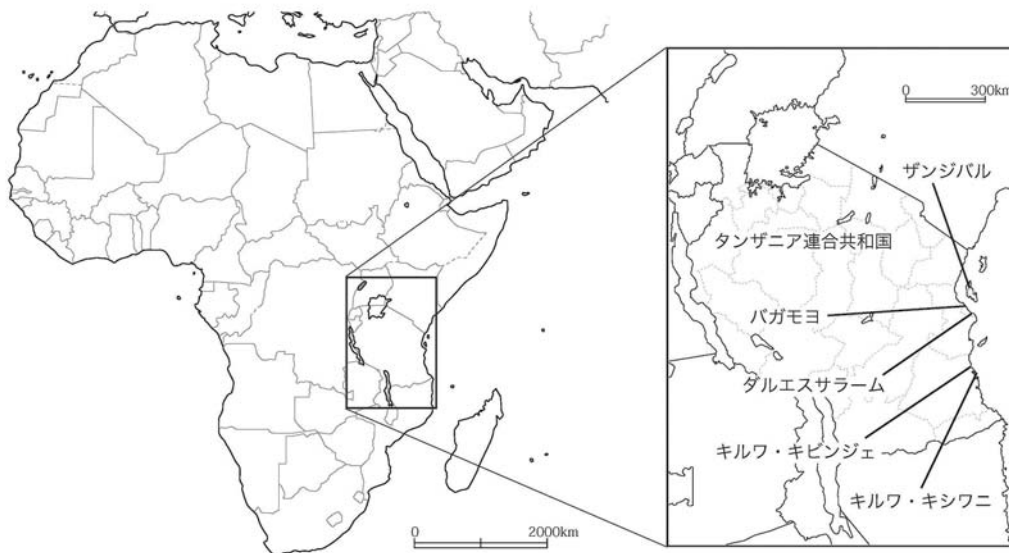


図1 アフリカ大陸とタンザニア海岸部



図2 ダルエスサラーム、ザンジバル周辺地図



図3 キルワ周辺地図



図4 ザンジバル・パレス博物館



図5 ザンジバル・ストーンタウン海岸



図6 パレス博物館所蔵の近代肥前磁器の色絵大壺



図7 カオレ遺跡



図8 カオレ遺跡出土の竜泉窯青磁



図9 クンダッチー出土青花碗



図10 クンダッチー出土青花小壺



図11 クワレ発見の中国製色絵皿



図12 ミササ遺跡出土磁器



図13 バガモヨのローマ・カトリック教会



図14 カトリック教会博物館



図15 カトリック教会博物館所蔵陶器皿(1)



図16 カトリック教会博物館所蔵陶器皿(2)



図17 カトリック教会博物館所蔵陶器碗



図 18 ダルエスサラーム国立博物館



図 19 ダルエスサラーム市内の住宅の内壁装飾



図 20 ダルエスサラーム国立博物館展示品



図 21 タンザニア国内出土の中国青花



図 22 タンザニア国内出土の中国青花



図 23 クンダッチー出土中国色絵皿



図 24 クンダッチー出土中国青花



図 25 キルワ・キシワニ遺跡の墓地



図 26 キルワ・キシワニ遺跡の墓の壁に残る青花



図 27 キルワ・キシワニ遺跡「小ドームモスク」

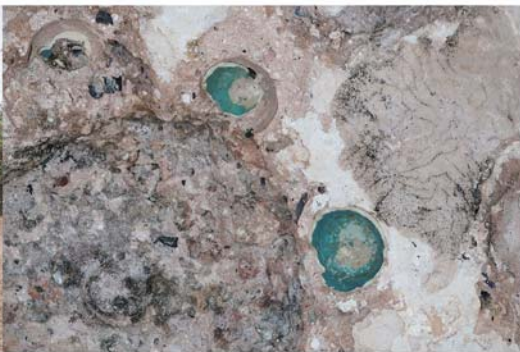


図 28 「小ドームモスク」の天井部に残る陶器



図 29 キルワ・キシワニ遺跡「スルタンの墓」



図 30 「スルタンの墓」発見の肥前磁器 (Chittick1974)



図 31 キルワ・キシワニ遺跡「チチックの家」



図 32 「チチックの家」付近海岸採集陶磁器